

『万葉集』の無助詞喚体句について

近 藤 要 司

(一) 無助詞の感動喚体句

「喚体句」という概念は、山田孝雄博士が創出したものである。そこには、博士の精神と言語の形式との関係を密接に提える立場が如実に現れている。我々が通常「文」と呼ぶものは、山田博士においては、原理上の単位である「句」と運用上の単位である「文」に分けられているが、その句は、「統覚作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の発表をいふ」(『日本文法学概論』)とされる。「統覚作用」とは、事態了解における精神作用のことである。山田博士における「句」とは、このように精神作用を通して形成された思想が言語として形を取ったものとして定義されるのである。

この句は、その句自身によって思想が過不足なく表現されうるか否かによって、「完備句」と、一語文などのような「不完備句」に分けられ、完備句は、さらに「述体の句」と「喚体の句」とに二分される。

この両者のうち、述体の句とは、主語と述語の対立と統一が句の根幹をなすものであり、「花が咲いた。」のような我々が通常思い描く「文」というものに近い。一方、喚体の句とは、古代語の「美しき花かも」のような類の文であり、山田博士の定義によれば「常に体言を骨子として、それを呼格とし、それを思想の中心点として、構成せ

らるるもの」(『日本文法学概論』)というものである。

一見、先程述べた不完備句の一語文と大差ないように思えるが、「美しき花かも」が、「(その)花、美し」という述体に対応した、つまり、「思想を過不足なく表現している」点において、完備句なのである。

さて、この喚体句はさらに先の「美しき花かも」のような感動喚体句と「老いず死なずの葉もが」のような希望喚体句に二分される。このうち、希望喚体句においては、句末の終助詞は必須のものであるが、感動喚体句においては終助詞はない場合もある。本稿では、この終助詞を伴わない感動喚体句を無助詞感動喚体句と呼ぶことにする。上代において、感動喚体句の典型的なものは、

・み吉野の象山の際の木末にハこだモ騒く(散和口)鳥の声カモ(鳥之聲可聞)(六卷九二四)

のように助詞カモあるいは助詞カを文末に伴うものである。これに対して、無助詞喚体句は、

・千鳥泣くみ吉野川の川音のやむ時なしに思ほゆる(所思)君(六卷 九一五)

のような体言で終わるもの、

・このころの秋の朝明に霧隠り妻呼ぶ鹿の声のさやけさ(音之亮左)(二〇卷二二四)

のような形容詞のサ語尾で終わるものがある。山田博士は、『概論』『奈良朝文法史』において、これらを喚体句の典型の一つにあげている。(注一)

また、これら以外に、

・茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の木年の知らなく(歳之不知久)(六卷九九〇)

のようなク語法によるものがある。ク語法によるものについては、山田博士はその『日本文法論 第二部 句論

句の性質 第二 述体の句 (三) 叙述体の句 (二) 中止述法』において、「下につゞくが如くなしてとめたる

如き形をとる」ものとして述体の一つに挙げているが、後述する連体形終止による擬喚述法と同じであると見れば、

これも感動喚体句の中にいれるべきである。

その『日本文法論』にいう擬喚述法は、

・かくのみにありける君を衣にあらば下にモ着むと我が思へりける（念有家留）（二二卷二九六四）
 のような連体形終止によるものであるが、これは万葉集にはまだ少数の用例しかない。

本稿で考察の対象とするのは、最初にあげた体言で終わるもの、すなわち、典型的な感動喚体句と形式が酷似するものである。

本稿作成にあたっては、吉村誠氏作成の万葉集の電子化テキストを利用させていただいた。

（二）無助詞感動喚体句と類似の構文

（二）の一 一語文の体言止

まず、無助詞感動喚体句と単なる体言止めの構文との区別を述べておく。単なる体言止の用例としては、

・後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へ我が背（標結吾勢）（二卷二二五）

のような命令・禁止や質問の相手に対する呼び掛け表現がある。これらの多くは、挙げた用例のように、連体修飾部を持たない。したがって、山田博士の完備句としての感動喚体句の形式からはずれるため、考察の対象からはずした。

また、

・春草は後はうつろふ巖なす常盤にいませ 貴き我が君（貴吾君）（六卷九八八）

・あしひきの山の常蔭に鳴く鹿の声聞かすやも 山田守らす子（山田守酢兒）（二〇卷二二五六）
 ・大野らに小雨降りしく木の下に時と寄り来ね 我が思ふ人（我念人）（二一卷二四五七）
 ・まそ鏡見とも言はめや 玉かぎる岩垣淵の隠りたる妻（隠而在嬪）（二一卷二五〇九）
 ・く松柏の 栄えいまさね 貴き我が君（尊安我吉美）（一九卷四一六九）
 ・あしひきの八つ峰の椿つらつらに見とも飽かめや植ゑてける君（宇恵弓家流伎美）（二〇卷四四八一）
 の六例については、連体修飾部が存在するが、これも、呼び掛けの一語文の特殊なケースと考えて考察の対象からはずした。

（二の二）「AはB」型名詞述語文との違い

体言は、「AはB」型の名詞述語文の述語成分となる場合がある。上代ではこのような場合には、助詞ゾが下接することが多いのであるが、

- ・標結ひて我が定めてし住吉の浜の小松ハ後モ我が松（後毛吾松）（三卷三九四）
 - ・人妻に言ふハ誰が言さ衣のこの紐解けと言ふハ誰が言（言者孰言）（二二卷二八六六）
- のように、体言のみで終わっている場合もある。このような例も考察からは除外した。

（二の三）倒置表現との違い

結果的に体言で一首が終わる場合には、倒置表現のものがあるが、これについては、

- ・青山の嶺の白雲朝に日に常に見れどもめづらし我が君（目頼四吾君）（三卷三七七）
- ・万世に語り継げとしこの丘に領巾振りけらし（比例布利家良之）松浦佐用姫（五卷八七三）

のような倒置による体言止であることが明確なものも考察の対象からは除いた。

ただし、これも終止形と連体形の活用形が同じものは、「美しく咲く。花」のような倒置なのか、「美しく咲く花。」のような無助詞感喚体句かは区別できない。これらの用例については、複数の注釈書を参照して、感喚体句の解釈を下したものがあれば、考察の対象に加えた。

(三) 無助詞感喚体句の全体像

(二)で除外したものを除いて、形式として無助詞感喚体句と呼べるものは、万葉集全体で八四例あった。

(注二)

これらの用例について、(四)で整理するカモ感喚体句との比較のため、

・修飾成分の形式

・骨子たる体言の種類

の二点について述べる。

(三の一) 修飾成分の形式

各類型の用例数と用例一つを挙げる。

○裸の動詞連体形 (三六例)

・鹿背の山木立を茂み朝さらず来鳴き響もす (寸鳴響為) 鶯の声 (六卷一〇五七)

○形容詞連体形 (九例)

・昔こそ外にも見しか我妹子が奥つ城と思へばはしき (波之吉) 佐保山 (三卷四七四)

これらのうち、八例が情意評価を表わす形容詞である。

○リ・タリの連体形（八例）

・み崎廻の荒磯に寄する五百重波立ちてモ居てモ我が思へる（我念流）君（四卷五六八）

○過去キの連体形シ（九例）

・磯の上に爪木折り焚き汝がためと我が潜き来し（吾潜來之）沖つ白玉（七卷一二〇三）

○ツ・ヌの連体形（二例）

・浜清み浦うるはしみ神代より千舟の泊つる（千船湊）大和太の浜（六卷一〇六七）

○打ち消し（ズの連体形ヌ）（七例）

・新室のこどきに至ればはだすき穂に出し君が見えぬ（見延奴）このころ（一四卷三五〇六）

○推量系の助動詞のム・ラム・ケムによるもの。一〇例。ム・ラム・ケムの用例については、倒置と迷うものばかりであるが、諸注の中には、喚体句ととらえているものもあるので、無助詞喚体句に含めてある。

ム 四例

・く遠き代にく神さびゆかむ（神左備將往）幸しところ（三卷三二二）

ラム 三例

・たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむ（朝布麻須等六）その草深野（一卷四）

ケム 三例

・いにしへにありけむ人の求めつつ衣に摺りけむ（衣丹揩牟）真野の榛原（七卷一一六六）

○打ち消し意志推量のマシジの連体形。二例。

・布当山山なみ見れば百代にモ変るましじき（不可易）大宮所（六卷一〇五五）

(三の二) 骨子たる体言の種類

感動喚体句は「直観直叙」の文形式であるから、その骨子たる呼格体言には、眼前の物が来ることが多い。ここでは、その眼前のものを示す語が、人称や固有名詞、指示代名詞といった実体指示の性格の強いものか、あるいは普通名詞で属性表示的性質の強いものであるかといった観点から、分類した。

(A) 第一人称者・第二人称者。あるいは、それらの所有物 二五例

ここに分類されるものは、「我」などの一人称者を表わす言葉と「君、妹」など二人称者を指す言葉あるいは主君などを指す言葉、およびそれらの所有にかかるものである。

(A1) 妹君背など 一七例

- ・み崎廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居ても我が思へる君（我念流吉美）（四卷五六八）
- ・道に逢ひて笑まししからに降る雪の消なば消ぬがに恋ふといふ我妹（戀云君妹）（四卷六二四）

(A2) 我・我が心 一例

- ・ありなみすれどありなみえずぞ言はえにし我が身（所言西我身）（二三卷三三〇〇）

(A3) 一人称者所有物 四例

- ・沖辺行き辺を行き今や妹がため我が漁れる（吾漁有）藻臥束鮒（四卷六二五）
- ・磯の上に爪木折り焚き汝がためと我が潜き来し（吾潜來之）沖つ白玉（奥津白玉）（七卷二二〇三）

(A4) 二人称者所有物 一例

- ・上つ毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ（遊吉須宜可提奴）妹が家のあたり（伊毛賀伊敝乃安多里）

(A5) 主君など 二例

・くあやにともしきく高照らす(高照) 日の御子(日之御子)(二卷一六二)

・山背の久背の若子が欲しと言ふ(欲云) 我れあふさわに我れを欲しと言ふ(吾欲云) 山背の久世(開木代來背)

(二一卷二三六二)

ただし、前の例は、倒置に解する説が有り、また後の例は呼び掛けに解する説もある。

(B) この、そのなど指示詞を含むもの 一九例

ここに分類されるものは、骨子たる体言に「このく、そのく」の指示詞が付属しているものである。

(B1) このころ 一六例

・くももしきのく大宮人の 玉梓の 道にモ出でず 恋ふるこの頃(戀比日)(六卷九四八)

・国栖らが春菜摘むらむ司馬の野のしばしば君を思ふこのころ(思比日)(二〇卷一九一九)

(B2) その他の指示詞を含むもの 三例

・たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむ(朝布麻須等六) その草深野(其草深野)(二卷四)

・鶉鳴く古しと人ハ思へれど花橘のにはふ(尔保敷) この宿(許乃屋度)(二七卷三九二〇)

・立ちて居て待てど待ちかね出でて来し君にここに逢ひかざしつる(挿頭都流) 萩(波疑)(二九卷四二五三)

最後の例は「ここに」の例であるがここに含めた。

(C) 固有名詞としての地名を含むもの 一七例

ここには地名と、固有名詞とはいえないが作者にとって自明である土地を指す言葉を含めた。

(C1) 固有名詞としての地名 九例

- ・浜清み浦うるはしみ神代より千舟の泊つる（千船湊）大和太の浜（大和太乃濱）（六卷一〇六七）
- ・清き瀬に千鳥妻呼び山の際に霞立つらむ（霞立良武）神なびの里（甘南備乃里）（七卷一二二五）

（C2）作者の中では自明で固有名詞に匹敵する場所の示す言葉 八例

- ・く天地と 長く久しく 万代に 変はらずあらむ（不改将有） 幸しの宮（行幸之宮）（三卷三二五）
- ・山高く川の瀬清し百代まで神しみゆかむ（神之味将往）大宮所（六卷一〇五二）

（D）普通名詞 二三例

ここにあげるものは、一首の解釈としては作者の眼前の具体的個物を指示しているかもしれないが、骨子たる体言自体には実体を指示する性質が希薄な名詞なものである。

（D1）鳥獣虫植物 八例

- ・志賀の浦に漁りする海人家人の待ち恋ふらむに明かし釣る（安可思都流）魚（一五卷三六五三）
- ・霰降り遠つ淡海の吾跡川楊刈れどもまたも生ふといふ（亦生云）吾跡川楊（七卷一二九三）

（D2）天体・天候・波など自然現象 九例

- ・さを鹿の朝立つ野辺の秋萩に玉と見るまで置ける（置有）白露（八卷一五九八）
- ・秋風の清き夕に天の川舟漕ぎ渡る（舟滂度）月人壮士（一〇卷二〇四三）

（D3）人物を差す言葉 三例

- ・住吉の得名津に立ちて見わたせば武庫の泊りゆ出づる船人（出流船人）（三卷二八三）
- ・春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ（出立）娘子（一九卷四一三九）

（D4）その他の普通名詞 三例

- ・武庫の浦を漕ぎ廻る（傍轉）小舟粟島をそがひに見つつ羨しき（乏）小舟（三卷三五八）
- ・真玉つく越智の菅原我れ刈らず人の刈らまく惜しき（惜）菅原（七卷一三四一）
- ・初春の初子の今日の玉箒手に取るからに揺らく（由良久）玉の緒（二〇卷四四九三）

（四）カ（モ）感動喚体句の様相

（三）で述べた無助詞感動喚体句と比較すべきカ（モ）感動喚体句は、万葉集に一〇〇例ある。もちろん、体言十カ（モ）のすべてが含まれるのではなく、

・海神ハくすしきものカ（靈寸物香）淡路島中に立て置きて白波を伊予に廻らし（三卷三八八）
 のような「AはBか」のような名詞述語文の疑問表現や、

・春雨に萌えし柳カ（毛延之楊奈疑可）梅の花ともに後れぬ常の物カモ（常乃物能香聞）（一七卷三九〇三）
 のように、「AかBか」の形になって選択疑問文となっているもの、およびこれに準じて感動喚体句の形式をとりながら、前後の文脈から疑問表現とせざるをえないものは除外した。

カ（モ）感動喚体句もまず

・修飾成分の形式

・骨子たる体言の種類

の二点について述べる。

（四の一）修飾成分の形式

各類型の用例数と用例一を挙げる。

○裸の動詞連体形（二九例）

- ・下つ瀬に小網さし渡す山川も依りて仕ふる（依弓奉流）神の御代カモ（神乃御代鴨）（二卷三八）

○形容詞連体形（二〇例）

- ・うったへに鳥は食まねど縄延へて守らまく欲しき（守卷欲寸）梅の花カモ（梅花鴨）（二〇卷一八五八）
- このうち、一八例が情意評価を表わす形容詞である。

○リ・タリの連体形（一三例）

- ・沖つ波来寄る荒磯を敷栲の枕とまきて寝せる君カモ（奈世流君香聞）（二卷二二二）

○過去キの連体形シ（四例）

- ・沼名川の底なる玉求めて得し玉カモ（得之玉可毛）拾ひて得し玉カモ（得之玉可毛）（二三卷三二四七）

○ツ・ヌの連体形（二例）

- ・悔しくも満ちぬる潮カ（満奴流塩鹿）住吉の岸の浦廻ゆ行かましものを（七卷一一四四）

○打ち消し（ズの連体形ヌ）（一九例）

- ・月立ちし日より招きつつうち偲ひ待てど来鳴かぬ（伎奈可奴）霍公鳥カモ（霍公鳥可母）（一九卷四一九六）

○ムの連体形（六例）

- ・吉隠の野木に降り覆ふ白雪のいちしろくしも恋ひむ我れカモ（将戀吾鴨）（二〇卷三三三九）

○ベシの連体形（四例）

- ・こと放けば沖ゆ放けなむ港より辺著かふ時に放くべきものカ（可放鬼香）（七卷一四〇二）

○マシの連体形（一例）

- ・初めより長く言ひつつ頼めずはかかる思ひに逢はましものカ（相益物歟）（四卷六二〇）

（四の二）骨子たる体言の種類

（三）と同様に骨子体言そのものが、現場指示性を強くもっているか否かという観点から分類した。

（A）第一人称者・第二人称者。あるいは、それらの所有物 三四例

（A1）妹君背など 二一例

- ・沖つ波来寄る荒磯を敷栲の枕とまきて寝せる君カモ（奈世流君香聞）（二卷二二二）

- ・暇なく人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹カモ（不相妹可聞）（四卷五六二）

（A2）我・我が心 五例

- ・思はじと言ひてしものをはねず色のうつろひやすき（變安寸）我が心カモ（吾意可聞）（四卷六五七）

- ・思ふらむ人にあらなくにねもころに心尽して恋ふる我れカモ（戀流吾毳）（四卷六八二）

（A3）一人称者所有物 ○例

（A4）二人称者所有物 四例

- ・あしひきの山椿咲く八つ峰越え鹿待つ君が（鹿待君之）斎ひ妻カモ（伊波比孀可聞）（七卷二二六二）
- ・妹に恋ひ寐ねぬ朝明にをし鳥のこゆかく渡る（此度）妹が使カ（妹使）（二一卷三四九一）

(A5) 主君など 四例

- ・あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬるとき(散去如寸) 我が大君カモ(吾王香聞)(三卷四七七)
- ・橘の下照る庭に殿建てて酒みづきいます(伊麻須) 我が大君カモ(和我於保伎美可母)(一八卷四〇五九)

(B) この、そのなど指示詞を含むもの 三例

(B1) このころ ○例

(B2) その他の指示詞を含むもの 三例

- ・橡の解き洗ひ衣のあやしくもことに着欲しき(殊欲服) この夕カモ(此暮可聞)(七卷三三四)
- ・秋の野を朝行く鹿の跡もなく思ひし君に逢へる今夜カ(相有今夜香)(八卷一六二三)
- ・我が宿のい笹群竹吹く風の音のかそけき(可蘇氣伎) この夕カモ(許能由布敝可母)(一九卷四二九一)

(C) 固有名詞としての地名を含むもの 一例

(C1) 固有名詞としての地名 一例

- ・我が背子を大和へ遣りて待つしだす(麻都之太須) 足柄山の杉の木の間カ(須疑乃本能末可)(一四卷三三六)
- 三)

(C2) 作者の中では自明で固有名詞に匹敵する場所の示す言葉 ○例

(D) 普通名詞 三七例

(D1) 鳥獸虫植物 一二例

二八

・人ごとに折りかざしつつ遊べどもいやめづらしき（伊夜米豆良之岐）梅の花カモ（鳥梅能波奈加母）（五卷八

・み吉野の象山の際の木末にはここだも騒く（散和口）鳥の声カモ（鳥之聲可聞）（六卷九二四）

（D2）天体・天候・波など自然現象 一〇例

・苦しくも降り来る雨カ（零來雨可）三輪の崎狭野の渡りに家モあらなくに（三卷二六五）

・常はさね思はぬものをこの月の過ぎ隠らまく惜しき宵カモ（惜夕香裳）（七卷一〇六九）

（D3）人物を差す言葉 四例

・いとのかきて薄き眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ人カモ（不相人可母）（二卷二九〇三）

・朝露の消なば消ぬべく恋ひしくもしるくも逢へる（知久毛相）隠り妻カモ（隠都麻鴨）（一三卷三二六六）

（D4）その他の普通名詞 一一例

・宝ともなれる山カモ（成有山可聞）駿河なる富士の高嶺ハ見れど飽かぬカモ（雖見不飽香聞）（三卷三一九）

・西の市にただ独り出でて目並はず買ひてし（買師）絹の商じこりカモ（商自許里鴨）（七卷二二六四）

・かわづ鳴く六田の川の川柳のねもころ見れど飽かぬ川カモ（不飽河鴨）（九卷一七二三）

（E）ころ 一二例

無助詞感動喚体句には「くこのころ」の例が見られたが、カ（モ）感動喚体句には指示詞のない「ころ」が見られる。

・初花の散るべきものを人言の繁きによりてよどむころカモ（止息比者鴨）（四卷六三〇）

・世間も常にしあらねばやどにある桜の花の散れるころカモ（不所比日可聞）（八卷一四五九）

(F) もの 一三例

無助詞感動喚体句には「しもの」の用例はないが、カ(モ)感動喚体句には、以下のように用例が見られる。これらの多くは反語の表現ともとれることから、感動喚体句からはずして、述体にいれる考え方もある。しかし、形式的には感動喚体句の形式であることと、かならず反語的な意味合いが添うわけでもないので、カ(モ)感動喚体句の類型としてたてた。用例は反語的なものとそうでないものを一例ずつあげた。もとより後者は少ない。

- ・ こと放けば沖ゆ放けなむ港より辺著かふ時に放くべきものカ(可放鬼香)(七卷一四〇二)
- ・ 阿遅可麻の潟にさく波平瀬にも紐解くものカ(比毛登久毛能可)愛しけを置きて(一四卷三五五一)

(五) 無助詞感動喚体句とカ(モ)感動喚体句の比較

(三)(四)で見たように、無助詞感動喚体句とカ(モ)喚体句には様々な違いが存在するのだが、そのことは、無助詞喚体句の用例が混質的であるということによる面もある。たとえば連体修飾部がラムで終わるものは、文末ハモによる体言止めの例と似ている。また、(三)に挙げた「我が潜き来し(吾潜來之)沖つ白玉」(七卷二二〇三)の例は、文末ゾによるものに近い。その点に留意しつつ両者の違いを見てゆくことにする。

(五の一) 修飾成分の比較

	無助詞感動喚体句	カ(モ)感動喚体句
用例数	八四例	一〇〇例
○裸の動詞	三六例	三二例
○形容詞	一〇例	二〇例

○リ・タリ	八例	一三例
○キ	九例	四例
○ツ・ヌ	二例	二例
○打ち消し	七例	一九例
○ム・ラム・ケム	一〇例	六例
(ム四例 ラム三例 ケム三例)		
○マシの連体形	〇例	一例
○ましじ	二例	〇例
○べし	〇例	四例

連体修飾成分について、裸の動詞連体形が一番多いのは両者共通である。しかし、形容詞連体形については、無助詞のものでは、一〇例(一一%)であるのに、対してカ(モ)は二〇例(二〇%)と、カ(モ)の方が多くなっている。これら形容詞のほとんどが情意評価を表わす形容詞であるが、これらにさらに、

・夜ぐたちに寝覚めて居れば川瀬尋め心ものに鳴く千鳥カモ(鳴知等理賀毛)(一九卷四一四六)

の「心もしのに」のように情意評価の語が連用修飾の形で連体修飾部に含まれる用例数を加えて比較すると、カ(モ)感動喚体句は二九例(二九%)、無助詞のものは九例(一〇%)となり、カ(モ)の方が三倍近くある。

近藤(一九九七)で指摘したように、中古のカナによる感動喚体句には情意評価の語が必ず含まれる。上代のカ(モ)の感動喚体句にもその傾向がうかがえるということは、カという助詞を含む感動喚体句の特徴と考えられる。筆者は助詞カによる感動喚体句は、「話者の内面に生じた情意や評価の対象を模索し、その対象を捕捉した」こと

を表現するものだと考えており、カ(モ)の感動喚体句に情意評価の語が多いことはその反映であると思われる。

助動詞については、まず打ち消しズの連体形じよるものがカ(モ)喚体句に多いことに気付く。このタイプの用例はカ(モ)の場合には、

・暇なく人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹カモ(不相妹可聞)(四卷五六二)

・月立ちし日より招きつつうち偲ひ待てど来鳴かぬ(伎奈可奴) 霍公鳥カモ(霍公鳥可母)(一九卷四一九六)

のように、「(私に)逢おうとしない妹」「来て鳴かない霍公鳥」という目の前には存在しないものを語るものが多い。つまり、これらの用例では、骨子たる体言が表わす対象は作者の眼前にないものである。

これに対して、無助詞感動喚体句にも打ち消し助動詞が連体修飾するものが七例あるが、それらは、すべて

・天の川瀬を早みカモぬばたまの夜ハ更けにつつ逢はぬ(不合)彦星(一〇卷二〇七六)

・神のごと聞こゆる瀧の白波の面知る君が見えぬ(不所見)このころ(一二卷三〇一五)

のようなものであって、骨子たる体言そのものの非存在を語るものではない。(注三)

感動喚体句は本来的には、「美しき花かも」のように眼前に遭遇した事態について語るものが典型であるとすれば、「偲ひ待てど来鳴かぬ霍公鳥カモ」のような用例は、非存在を対象とすることで、特殊なケースといえる。このような特殊なケースがカ(モ)感動喚体句に存在することは、注目すべきである。

カ(モ)感動喚体句にのみ存在するものとしては、マシの一例を除いては、ベシの四例がある。これらは、すべて「べきものか」の形で反語的な意味になっている。カ(モ)は述体の中で用いられれば、反語や疑問になる場合が多いから、これらの用例は、感動喚体句の形式ではあるが、述体としての意味に傾いているものであると考えるべきであろう。つまり、「べきものか」という形式があるのは、疑問や反語にも用いられるカ(モ)の意味個性によるものである。

一方、無助詞喚体に特徴的なものとしては、まず、ラムケムが連体修飾している例があげられる。ラムによるものはカ(モ)感動喚体句には存在しない。先にも述べたようにあるいは倒置とすべきかもしれないが、ム・ラム・ケムが連体修飾していると見るなら、これらは、

・葦辺にハ鶴がね鳴きて港風寒く吹くらむ津乎の崎ハモ(津乎能埼羽毛)(三卷三五二)
 のようなハモの例に準じて考えるべきであろう。

ケムの例もカ(モ)には存在しない。こちらについては、前出の(七卷一一六六)と

・静まりし浦波さわく我が背子がい立たせりけむ(射立為兼)厳櫃が本(一卷九)(注四)
 は、後に述べるように骨子たる体言が固有地名であるという無助詞喚体全体に通ずる特徴がある。また

・大夫の鞆取り負ひて出でて行けば別れを惜しみ嘆きけむ(奈氣伎家牟)妻(二〇卷四三三二)
 は、前の長歌に付属した反歌にあたるものであり、長歌に述べられた東国から防人に立つ男と妻の別れを踏まえたために「ケム」が用いられているという特殊な環境にあるものである。

無助詞喚体句のみに存在するものとしては、マシジキの例が(三)に示した「百代にモ変るましじき(不可易)大宮所」(六卷一〇五五)の用例と

・天の下く知らしめさむと百代にも変るましじき(不可易)大宮所(六卷一〇五三)
 の二例がある。これについては、万葉にマシジの連体形の用例が少なく、なんともいえないが、続日本書紀宣命の「不改常典」(アラタムマシジキツネノノリ)(第三詔)「不改自常典」(アラタムマシジキツネノノリ)(第一四詔)の何らかの影響であるとも考えられる。(注五)

連体修飾部の違いを見てきたが、無助詞感動喚体句が混質的であることや、和歌それぞれの特殊事情を除けば、

見るべきことは、カ(モ)に情意評価を示す形容詞の例が多いことと、打ち消しズの連体形によって、骨子たる体言の示すものが眼前には存在しないことを示す例があることである。

(五の二) 骨子たる体言の比較

無助詞感動喚体句

カ(モ)感動喚体句

● 第一人称者など

二五例

三四例

○ 妹君背など

一七例

二一例

○ 我・我が心

一例

五例

○ 一人称者所有物

四例

〇例

○ 二人称者所有物

一例

四例

○ 主君など

二例

四例

● 指示詞を含むもの

一九例

三例

○ このころ

一六例

〇例

○ 他の指示詞を含むもの

三例

三例

● 固有地名を含むもの

一七例

一例

○ 固有地名

九例

一例

○ 自明の場所の示す言葉

八例

〇例

● 普通名詞

二三例

三七例

○ 鳥獸虫植物

八例

一二例

○天体など自然現象	九例	一〇例
○人物を差す言葉	三例	四例
○その他の普通名詞	三例	一一例
●ころ	○例	一二例
●もの	○例	一三例

両者とも、作者にとって大きな関心の対象である夫妻恋人主君が骨子たる体言であることが多いことは共通している。

しかし、指示詞を含む用例では大きな違いあり、無助詞の方は一九例（二三％）であるのに対して、カ（モ）の方はわずか三例（三％）である。

また、固有名詞としての地名を含む例は、無助詞では九例（二二％）（ラムケムの用例も含む）であるのに対して、カ（モ）は一例（一％）と違いが大きい。また、

・遠つ人松浦佐用姫夫恋ひに領巾振りしより負へる（於返流）山の名（五巻 八七一）

のような前後の和歌などから作者にとって自明であり地名とはいえないまでも地名に準じて考えられる用例を含めると、無助詞一七例（二〇％）、カ（モ）一例（一％）とその差はさらに広がる。

指示詞で示されているもの、および地名は、眼前の実体を直接指示するという性格が強い。従って、無助詞感動喚体句の骨子たる体言は、実体指示的なものが多いということになる。反対に非実体指示的な普通名詞が骨子体言である用例は、無助詞の方は二四例（二九％）で、カ（モ）の方は、「もの」の用例を除外しても、四九例（四九％）ある。

もちろん、これは傾向差ではないが、無助詞感動喚体句の骨子体言が実体指示性をもつものに傾き、カ(モ)感動喚体句の骨子体言が非実体指示的な普通名詞に偏るのである。このことは、無助詞感動喚体句の方がより実体性の明示が必要なものであることを示唆している。

(六) 無助詞感動喚体句とカ(モ)感動喚体句の違い

(五) で見たように、無助詞喚体句とカ(モ)喚体句には、いくつかの大きな違いがあった。無助詞喚体句の用例のうち、ハモに近い用例を除いて考えれば、それは、

(1) カ(モ) 感動喚体句は情意評価の語をその内部に含むことが多い。

(2) カ(モ) 感動喚体句は眼前には存在しないものを対象とすることができる。

(3) 無助詞感動喚体句はカ(モ)喚体句に比較して、より実体性の明示を必要とする。

(1) ～ (3) までの違いは、結局、カ(モ)感動喚体句が助詞カと助詞モの存在によって、単なる遭遇対象の呼び掛けに連続した表現から、独特の表現へ一歩踏み出していることの現れと捉えられよう。(注六)

(1) に関しては(五)に述べたように、これが、カを含む感動喚体句の特徴の一つであると言える。

(2) は、カ(モ)感動喚体句が文末カ(モ)という形式において、話者の情意の対象を示す感動喚体句であることを保証されており、そのために、現前の実体ではないものへの言及もしやすかったのだと考えられる。

(3) については、逆に、無助詞感動喚体句は、そのような保証がないために、内容として実体性を明示せねば表現として成立しにくかったという事情の現れであると考えられる。

無助詞喚体句が遭遇した対象の名を呼ぶというような「呼び掛け」と連続しているのは、当然のことであるが、無助詞喚体句と比較して、カ(モ)感動喚体句の特徴も浮かび上がってくるのである。それは、カとモという助詞

の個性によって支えられている表現であるという点であろう。ここまでは述べなかったが、カ(モ)の用例には、
 ・我が背子が白栲衣行き触ればにほひぬべくモ(應染毛)もみつ山カモ(黄變山可聞)(二〇卷二一九二)
 のように文中に詠嘆のモを含むものが多数存在するが、無助詞喚体句にははっきり詠嘆のモがあるといえる用例はない。このことは、無助詞喚体句は、係助詞と無縁なところに成立するものであり、一語文的な呼び掛け表現と連続するものであり、文形式としては消極的なものであることの表れである。

これに対して、カ(モ)感動喚体句は、根底には遭遇事態の名を呼ぶという呼格の性格を持ちながらも、カやモなど係助詞に積極的に構成された文であり、単純な呼び掛けでも、述体でもない独特の文形式となっているのである。

このように係助詞に支えられていることが、

・春日山朝居る雲のおほほしく知らぬ人にモ恋ふるものカモ(戀物香聞)(四卷六七七)
 のような情意というよりも概念的思考というべき内容まで表現することまでも可能にしているのである。

注

注一 上代におけるサ語尾のほとんどの用例は、このような感動喚体句の句末に現れ、後代の「暑さ寒さも彼岸まで」のような述体内部の構成要素となる例は皆無である。

注二 ただし、長歌の内部にまだ数例あるかもしれないが、長歌の内部に無助詞感動喚体句と思われるものがあったとしても、そこで確かに一文が終結しているかの判断が難しいので、長歌の内部の中のものはこの八四例に含まれていない。ただし、長歌の最後にあるものは、例に含めてある。

注三 「彦星」の例は、「彦星が逢おうとしない」である。

注四 第一句第二句は澤潟注釈の読みに従う。

注五 一〇五三歌は、一〇五〇長歌とともに「讃久邇新京歌二首 并短歌」としてならべられており、その一〇五〇歌の冒頭に「現つ神（明津神）我が大君の」という句があり、これは澤潟注釈も述べているように宣命などによく見られる表現なので、「カハルマシジキ」も宣命の「アラタムマシジキ」のような表現の影響下にあると考えるべきかもしれない。

注六 いわゆる感動喚体句的な語法の中には、一語文に連続するものと、一語文とは異質なものの二系統があることについては、近藤（一九九八）に述べた。

参考文献

山田孝雄（一九〇八）『日本文法論』 宝文館 一九〇八年

山田孝雄（一九三六）『日本文法学概論』 宝文館 一九三六年

山田孝雄（一九五四）『奈良朝文法史』 宝文館 一九五四年

川端善明（一九六三）『喚体と述体―係助詞と助動詞とその層』『女子大國文』一五号 一九六三年十二月

尾上圭介（一九八六）『感嘆文と希求・命令文―喚体・述体概念の有効性―』『松村明教授古稀記念国語研究論集』

明治書院 一九八六年一〇月

野村剛史（一九九五）『カによる係り結び試論』『国語国文』六四巻九号 一九九五年九月

近藤要司（一九九七a）『係助詞の複合について（一）―万葉集のカとカモの比較―』『金蘭国文』創刊号

一九九七年三月

近藤要司（一九九七b）『源氏物語』の助詞カナについて』『金蘭短期大学研究誌 第二八号』一九九七年十二月

近藤要司（一九九八）「古代語における喚体句的表現の諸相について」『大阪私立短期大学協会 研究報告集 第

三五集』一九九八年

近藤要司（一九九九）「係助詞の複合について（三）——『万葉集』のハモについて——」『金蘭国文 第三号』

一九九九年三月